

☆☆文庫あれこれ☆☆

◆50年近くもこの地を訪れているのに、ここ10年ゆっくりと大室高原を散策したことがありません。今年はずいぶん、いろいろな場所を訪ね歩きたいです。◆それにしても、冬の景色のまたすばらしいこと。枯木立の間から見る大島の全景。朝日に照らされ、金粉が撒き散らされたかのように金色に輝く海。しっかりとそこに在る大室山。暮れから正月にかけて伊豆の自然に、清々しい思いをもらいました。◆時々おはなしを語りに行く機会(ストーリーテリング)があります。先週、栃木県宇都宮市で200人の前で語りました。新井満作・訳詩・作曲『千の風になって』です。そうしたら、この詩が大晦日の紅白歌合戦で歌われたと聞きました。◆この詩は、愛するものを失って途方に暮れている人を癒す詩として静かに広まっていますが、この詩を題材にした『千の風になって』(理論社から絵本で出版)は、死と再生の、心に響く物語です。◆一昨年、大室高原のワイルドスミス美術館で偶然手に入れたもので、憶えて何箇所かで語り、今では私の好きな持ち話のひとつです。この間はチャリティショーで目の不自由な方々にも聴いてもらったのですが、その方たちが泣いておられたのが心に残りました。いつか、ここでも聴いていただきたいと思います。◆先月少しまとまって寄贈本(140冊)があり、嬉しい限りです。また、昨年話題になった本を15冊ほど購入しました。リクエスト本も毎月少しずつ入れていますが、本が増えると置く場所のことを考えねばなりません。◆今年は、読みたいものがみなさんの目にとまるように工夫した本の配架をと思っていますが、なかなか・・・(係り一同頑張ります。もう少しお待ちください)。◆ホームページを立ち上げました!詳しくは来月号でお知らせできるかしら?◆やっとポストを設置しました。でも本の返却箱には使えませんのでお含みおきください。(西村)

♥♥イベントのお知らせ♥♥

まだちょっと先ですが・・・

「春休み・お花見頃のおはなし会」を

3月31日(土)午後(大きい人向け)

4月1日(日)午前(小さい人向け)

開催します。

(通常の文庫の日ではありませんのでご注意ください!)

語り手は、東京から、とても楽しい語りをして
くださるベテランをお招きしています。

詳しい時間や、プログラムは2月の文庫だよりにて
お知らせします。

★また5月にもおはなし会を予定しています★
お楽しみに!

大人も子どももたくさんおはなし聴いて
心を羽ばたかせましょう。

☆☆今後の開館スケジュール☆☆

◆文庫の時間は土曜日は午後2時～5時
日曜日は午前10時～午後3時

◆1月は、20、21(第3土日)。

◆2月は第3土日の17、18日です。

◆3月も第3土日の17、18日です。

◆毎月開館日の日曜には、子どものための
小さなおはなし会があります。
午前10:00～10:30です。

沙羅の樹文庫だより

No.5

(2007年1月号)



みなさま、お元気で新年をお迎えのことと
存じます。

2007年はどんな年になるのでしょうか?

悲惨な事故やいじめのない明るい年に

したいですね!!

少なくともここ大室高原では

本好きな大人と子どものふれあいの中で

みんなが楽しい読書の時間がもてますように

沙羅の樹文庫はがんばりますっ!!

本年もよろしく願いいたします。

100冊読破一番乗りはdareでしょう?!

紹介・子どもの本 大人の本

★会員から会員へおすすめの1冊★

(文庫の棚の本を紹介していただいております)

年の初めということで、文庫の強力な助っ人お二人にお願いしました。

『かさをささないシランさん』

(谷川俊太郎 アムネスティ・インターナショナル作
いせひでこ絵 理論社刊)

あなたは雨の日にはかさをさしますか。少しの雨ならかさをささずにぬれて歩いたりするのは好きですか。雨が降ると「ピッチピッチチャップチャップ、ランランラン」なんてぬれながら歌って歩いたりしませんか。「かさをさしてない」というだけで、逮捕されてしまったシランさん。みんなと同じことをしないと「あの人はおかしい」と思われてしまう。そんな社会はこわいと思いませんか。いろいろな考えの人がいるから世の中楽しい。私たちはいつも自分とちがう考えの人がいることも認め合いたいと思います。

同じような中味でちょっと前に「暮らしの手帖」で紹介されて話題になった「茶色の朝」(フランク・パブロフ物語)という小さな本も思い出しました。みんなが茶色の犬を飼うというこわい、こわい社会にならないようにするには。

そして絵を描いている「いせひでこ」さんは「1000の風 1000のチェロ」や「グレイのしっぽ」などすばらしい絵本をつくっている人で、この本の絵もすてきです。

(中西 景子)

『バスの図書館員ーイラクで本当にあった話』

(ジャネット・ウィンター絵文 長田弘訳 晶文社刊)

『バスの図書館員』を読みました。新年からとても重い本を取りあげてしまったのです。でもそれは、私がかつて住んだことのあるイラクの国で起きた出来事が書かれてあったからです。

これはイラクで本当にあったお話です。イラク最大の港町であり文化の中心都市であったバスの女性図書館員のアリア・ムハンマド・バクルさんが、戦時中本を守ったお話です。

2003年の春、イラクへの侵攻がバスラに迫っていました。そしてやがてバスラの町は爆撃による炎に包まれました。バクルさんは図書館の本をなによりも大切に思っていましたから、まず自分の家へ。そして入りきらなくなると町みんなの協力を得てとにかく3万冊を運びました。その9日後に図書館は燃え落ちましたが、本は無事でした。

イラクではこの4半世紀の間に大きな3つの戦争がありました。イラン・イラク戦争、湾岸戦争、そしてイラク戦争です。多くの市民が殺され、傷を負い、戦場での生活を余儀なくされています。そんなさ中、生きてゆくということだけでも大変なのに、本を守ったというすばらしさ、それもバクルさんだけでなく大勢の人も力を貸したのです。バクルさんの、戦争はいつかは終わるという希望を捨てずにいる姿に、私は救いと未来への明かりを感じました。

沙羅の樹文庫がオープンしてから半年、今年はどうな本に出会えるでしょうか。とてもわくわくします。

(森川 理恵)

★ ぜひ読んでいただきたい2冊です。2冊とも新しく入った本です。絵本形式ですが、いま、文庫に来てくれている小さな人にはひとりで読むには少し難しいと思ひ、大人向けの図書に分類しました。でも、おかあさん、おばあちゃん、ぜひ小さな人たちに読んであげてください。そしていっしょに考えていただきたいと思ひます。★

新しく入った本のコーナーを設けました(暫時的にですが)!

ホールから上がった図書コーナーとの境の書架(ホール側は昔話)の上です。一般書も児童書もここにおきます。2ヶ月したら、通常のお仲間さんところへ配架します。ぜひチェックしてみてくださいね。

こんな本を見つけました!

一般書の棚から

☆『ひざの痛みをとる本』(黒澤尚著 講談社刊)
ひどいひざ関節の痛みは、注射ではなく「筋力訓練」、電気ではなく「家庭での入浴」、安静ではなく「積極的に動く」、通院ではなく「自分で自宅で治療する」と著者は提唱しています。もう1冊、『自分で治せるひざ・足の痛み』(吉田元ほか共著 法研刊)も暮れから右足に疼痛を感じてへばっている私の強い味方になってくれるでしょうか(暮れに大量に寄贈してくれた友の本のなかにありました、彼もひざの痛みで悩んで購入したのかしらん)。

☆澤田ふじ子著の時代もの

『真贋控帳(地獄の始末)(霧の罌)』『羅城門』
『祇園社神灯事件簿(奇妙な刺客)(夜の腕)』
『公事宿事件簿留帳(奈落の水)(ひとでなし)』
『七福盗奇伝』『討たれざるもの』 などなど。

☆宇江佐真理著の時代もの

『髪結い伊三次捕物余話(幻の声)(さらば深川)((さんだらぼっち)(黒く塗り)』『おちゃっぴい』『春風ぞ吹く』など。

(文庫本ですが、東京への行きかえりつつ読みました。私は藤沢周平大好き人間で女性の作家は敬遠していましたが、なかなか。男性読者に好まれるようです。ご主人にいかがでしょうか)

☆『私の食自慢・味自慢シリーズ(すし)(てんぷら)(そば)(うどん)(カレーライス)(ラーメン)(丼/茶漬)(おでん/鍋)』

(これは、文庫オープンの際、出版社から寄贈されたもので、私は、料理のつくり方だとばかり思っていました。先日五目寿司をつくらうと、自己流ばかりでは脳がないと思ひ、このシリーズを覗いてみたら、なんと、各界著名人のテーマに纏わるエッセイでした。ほんのりしたり、しみりしたり、涎がでそうになったり・・・みなさんにもご一読をおすすめします。)

●次回は子どもの本、大人に読んでもらいたい子どもの本をとりあげます。(文庫の本掘り起こし作業人)